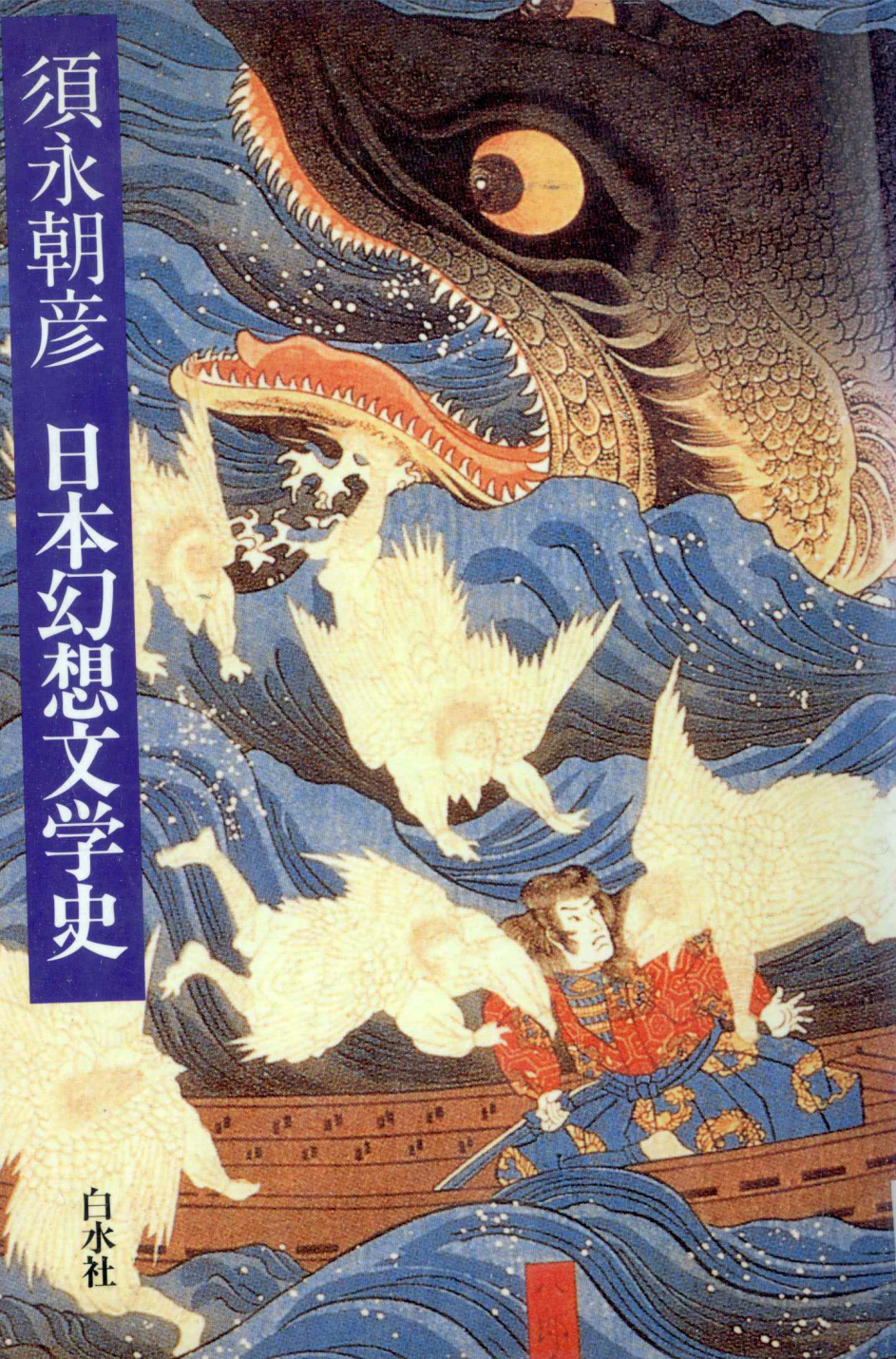
須永朝彦

日本幻想文学史



白水社

須永朝彦

日本幻想文学史

著者略歴
一九四七年足利生
歌人・作家
主要著書
「鉄幹と晶子」「東方花傳」「就眠儀式」「天使」「血のアラベスク」「ルートヴィヒII世」「黄昏のウィーン」「歌舞伎ワンダーランド」「世紀末少年誌」他

日本幻想文学史

一九九三年九月一〇日印刷
一九九三年九月二五日発行

著者 © 須永朝彦
発行者 藤原一晃
印刷所 東洋経済印刷株式会社
発行所 株式会社 白水社
東京都千代田区神田小川町三の二四
電話 営業部〇三(三二九一)七八一一
編集部〇三(三二九一)七八一一
振替東京 九一三三二二八
郵便番号一〇一

黒岩製本

ISBN 4-560-04313-2

Printed in Japan

Ⓡ〈日本複写権センター委託出版物〉
本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3269-5784)にご連絡ください。

日本幻想文学史

、

装幀　石黒紀夫

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

目次

はじめに——〈幻想文学〉を繞って　5
譚話の祖型——神話・伝説・説話　15
怪異の伝播——説話集の盛行　29
王朝伝奇——作り物語の中の浪曼と怪異　43
御霊と修羅——雑史・軍記が語る怪異　61
芸能が語る他界——能・幸若舞　79
物みな化身の物語——御伽草子の世界　93
奇想の語り物——説経・浄瑠璃　113
怪談から伝奇小説へ——近世怪異小説略史　129
超時代的感覚の魅力——歌舞伎の幻想性　161
戯作の末路——江戸から明治へ　175
一つの指針として——近代の幻想作家　195

細部の驚異——泉鏡花の一殊色　199
金と銀——潤一郎と春夫の探偵小説　205
見者の愉悦と悲哀——日夏耿之介　219
夢の通い路——王朝物語の再生　225
驚異のエンターテインメント——異端文学十選　239
妖人魔人怨霊小事典　243
日本幻想文学年表　257
後記　284
索引　i

はじめに——〈幻想文学〉を繞って

〈幻想文学〉の呼称を冠せられた小説類にひとかたならぬ関心を抱きながらも、私は相応に長い間、この呼称に対して多少の肯い難いものを覚えていた。何やら文学というもの悉くが幻想であるかのごとく思われるから正しくは〈幻想的文学〉と呼ぶべきではないか、むしろ〈綺想文学〉の方がいいのではないか、いや古来の〈怪談〉でも事足りるのではあるまいか、などと頻りに愚かな考えを紆らせたものである。

しかし、私などの拘わりをよそに〈幻想文学〉という呼称は着々と広まり、今や相応に定着を見ている模様である。〈幻想文学〉を惹句として売られる文芸書は増える一方であるし、雑誌の特集にも度々採り上げられている。また〈幻想文学〉を名乗る雑誌や〈幻想文学〉を冠した全集・叢書の類が既にあり、都会の書店には常設の書棚も見られる。

〈幻想文学〉なるものが、或る日、突如として出現した筈はないと思われるから、来歴を探れば、その前身のごときが知られよう。我が国のことに限れば、その前身は、おそらく〈怪談〉や〈怪奇小説〉〈怪異小説〉である。〈幻想と怪奇〉などと並列された過渡的な時代もあった、いや今も変わらな

いのかも知れない。前身の呼称は、すなわちジャンルを限定する〈怪奇〉〈怪異〉は、至極明快なものと映る。比べて〈幻想文学〉〈幻想小説〉の場合、呼称がただちにジャンルの内容を喚起させてくれぬようなもどかしさを覚える。それは、「幻想をいだく」だの「幻想にすぎない」だのという日常よく使われる言い回しを想い合わせれば頷かれるだろう。これらの用法では〈幻想〉は〈空想〉と殆ど同義であり、大体において〈空想〉は否定的に捉えられがちな言葉である。かかる連想が働くということは、やはり未だ〈幻想〉なる言葉自体が揺れ動いていると考えるべきであろう。そもそも〈幻想〉という言葉自体に聊か胡散くさい気配が看じられるのであり、出自も判然としないのだ。

今日、私たちが頻繁に用いている言葉の中には、〈神経〉や〈意志〉などのように、幕末から明治にかけて押し寄せる西洋文明に対応するために欧語の訳語として新たに考案された漢語が少なからずあり、〈幻想〉も左様な新造漢語の一つと思われるが、その出自が判然としない。まず一冊本の『大言海』（明治二十四年）に見当たらず、諸橋轍次の『大漢和辞典』には出ているものの、〈幻影〉や〈幻化〉には有る出典の引用が無く、すなわち仏典や漢籍から出たものではないと知れる。そして、明治以前の本邦の文物にも使用の例を見たことがないから、中国渡来の漢語ではないと推測される。おそらく明治から大正にかけてfantasyに類する欧語の訳語として出現したのであろう。

私が調べたのはここまでで、そののち気に懸けつつも突き詰めて調べることもせず、かかることどもを〈幻想文学〉に関する原稿を依頼された折々に繰返し記し、お茶を濁すような態度で自他を胡麻化してきたのだが、ごく最近ジャン＝リュック・スタインメッツの『幻想文学』（白水社・文庫クセジュ）を読んでいたら、中島さおり氏の「訳者あとがき」に私が迂闊に書き流した〈幻想〉の語の出自

に関わる部分が引用されているので、聊か慌てた。なぜ慌てたのかと申せば、私などよりも早く〈幻想〉の語の出自を精しく調査している篤学の士のあったことを最近知り、その調査ぶりに比べれば、中島氏に引用された拙文中の〈推測〉などはいかにも粗雑と思われたからである。件の調査をなしたのは国文学者の千葉宣一氏で、「澁澤龍彦と中井英夫」（『國文學』昭和59年8月号・特集＊幻想文学）の冒頭に次のような一節がある。

明治十四年刊行の『哲学字彙』で初めて、Hallucinationの訳語として、《幻想》が登場。その後、《幻覚》に定着するまで、主に哲学・心理学の領域で流通した。注目すべきは、ロプシャイドの"An English and Chiniese Dictionary" Hong Kong: Daily Press（1866-68）の底本的な影響で、その日本版、『英華和訳字典』（中村敬宇校正、津田仙、柳沢信夫、大井鎌吉訳。乾・明治九、坤・明治十二）を経て、明治十六年刊行の、羅布存徳原著・井上哲次郎『訂増英華字典』（藤本氏蔵版）に、Fancy, Fantasm, Fantastic, Fantastical, Fantastically等の飜訳語として、〈幻想〉〈幻想的〉が出現したことである。

どうやら〈幻想〉は、欧語に対応する漢語が盛んに新造された明治十年代の産物と見做して差閊えなさそうだが、今日の使用の様態を欧語に対比してみると、必ずしもfancy, fantastic, fantasyの系統に即くとも言い切れず、「幻想をいだく」とか「幻想にすぎない」とかいう場合は、むしろillusionに対応するのではないかと思われる。フランス語やドイツ語との対比を試みるならば更に錯綜

した様態が浮彫にされるだろう。国語辞典類の定義にも一種の混乱が認められ、この言葉が発する胡散くさい気配の一因をなしているように思う。

この〈幻想〉が〈文学〉や〈小説〉と結びつくのは何時頃かということになると、依然としてはっきりしない。千葉氏は「戦後の日本文学における、《幻想小説》(Conte fantastique)の史的展開を検討する時、昭和二十三年十一月に刊行された、ジェラール・ド・ネルヴァルの『夢と人生』(佐藤正彰訳、筑摩書房)が、当時の文学的青春にあたえた強烈な衝撃を指摘しておきたい」と述べているが、この時期に〈幻想文学〉とか〈幻想小説〉とかの呼称があったかどうかには言及していない。明治・大正・昭和戦前の文学書に〈幻想文学〉の語が登場しているかどうか、迂闊にして私は分明になしえないが、たとえば日夏耿之介の著作には〈神秘文学〉や〈怪異派文学〉の語は見えても〈幻想文学〉は見当たらない。因みに川端康成の『水晶幻想』の刊行は昭和六年である。

〈幻想文学〉の呼称ないし概念は、近世以来の〈怪談〉の言い換えである〈怪異小説〉の類とは異なり、西洋文学——特に浪曼主義以降の西洋文学享受の果てに想定かつ形成されてきたことだけは確かだと申し得るので、誰がいつ使い始めたかはともかくも、呼称として定着し始めたのは昭和四十年代に至ってからではなかったかと追想される。それまで、この分野の作品は〈怪奇小説〉の呼称に括りこまれ、文学を〈純〉と〈通俗〉に分けようとするこの国の近代文芸批評からは黙殺同然の扱いを受けてきたのであった。

昭和三十一年(一九五六)にハヤカワ・ミステリ・シリーズから〈英米怪談集〉の副題を附した『幻想と怪奇』①②が刊行されているが、再版するまでに十一年の歳月を要している。いかに、この

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

手の作品の読者がマニアックで少数であったかということの証左となろう。しかし、このアンソロジーが再版された頃には〈異端文学〉が持て囃され、小栗虫太郎や夢野久作や久生十蘭の復権があり、今は無き桃源社から《世界異端の文学》が刊行され（昭和四十一年から）、澁澤龍彥の存在が注目され始めた。あとは雑誌『血と薔薇』の創刊（四十三年）、『怪奇小説傑作集』全五巻（創元推理文庫・四十四年）、『怪奇幻想の文学』（新人物往来社・四十四年）、雑誌『ユリイカ』の〈特集・幻想の文学〉（四十五年）、雑誌『幻想と怪奇』創刊（四十八年）、雑誌『奇想天外』創刊（四十九年）、雑誌『幻影城』『牧神』創刊（五十年）、《世界幻想文学大系》刊行（国書刊行会・五十年から）、《小説のシュルレアリスム》刊行（白水社・五十年から）……と一挙に展開の観があった。

この間に〈幻想文学〉という呼称が定着したに違いないのだが、その概念については論理的な考察が殆どなされず、怪異的傾向の濃厚な、また反現実的志向の強い作品を等しなみに括ってしまったのだと顧みられる。五十年（一九七五）にはツヴェタン・トドロフの“Introduction à la Littérature Fantastique”が『幻想文学――構造と機能』の訳題を附されて刊行されたが、広く読まれた形跡はない。このトドロフの名高い著作や、その後に邦訳されたロジェ・カイヨワの『妖精物語からSFへ』（サンリオSF文庫）、マルセル・シュネデールの『フランス幻想文学史』（国書刊行会・クラテール叢書）、ジャン＝リュック・スタインメッツの『幻想文学』など一九六〇年代以降の理論書を読むと、海彼の西欧においても〈幻想文学〉は輓近に興った呼称であり概念であることが知られ、これらの著作（すべてフランス語）が、まずジャンルの規定や概念の把握のごときに躍起となっているさまに聊か驚かされるものの、しかし当然のことかと腑に落ちる心地もするのである。

〈幻想文学〉の規定に最も熱心なのはフランスの理論家達である。フランスは十八世紀にジャック・カゾットの『恋する悪魔』という〈幻想的な物語〉を送り出しているが、これは孤立した例外的な作品であり、実はフランスは、この手の文芸に関しては後進国であったと申しても差間えない。先行したのはイギリスとドイツである。イギリスでは十八世紀の廃墟趣味・中世趣味流行の中から怪異を盛り恐怖を煽るゴシック・ロマンスなる小説が生まれ、この嗜好が十九世紀初頭の浪曼派に継承されてゆく。ドイツでは十八世紀末の疾風怒濤（シュトルム・ウント・ドランク）時代の後を受けて中世指向の強い浪曼主義が興り、その中からE・Th・A・ホフマンの〈幻想と怪奇と戦慄〉に彩られた驚異的な小説が生み出された。多くの論者の説くところによれば、フランスのこの分野の活動が顕著になるのは、英独の浪曼派の影響によるところが大きい。具体的にはバイロンとホフマンの影響である。バイロン作と誤伝されたジョン＝ウィリアム・ポリドリの『吸血鬼』はシャルル・ノディエらを夢中にさせたし、ホフマンの『カロー風幻想曲集』以下の作品は多くのフランスの作家達を魅了して conte fantastique という呼称を誕生させた。言わば英独の後塵を拝している訣で、このことがトラウマとなって後にこの国の理論家達をして理論づけに勤（いそ）しましめたのだ、と申したら勇み足になるだろうか。

イギリスでは、この種の理論づけは殆どなされなかった。ゴシック・ロマンスもファンタジーも、更には menace, horror, supernational, uncanny, terror などの語で括り分けられる作品もSFも、それぞれの呼称で書き継がれ、然も同傾向のものと見做されてきたふしがあり、現代アメリカのエンターテインメントに至ると更に細分化されてきている。かかる様態はフランスの理論家達を苛立たせたと覚しい。

フランスの理論家達の下す〈幻想文学＝littérature fantastique〉の規定はかなり煩瑣で然も厳密である。詳しくは、ピエール＝ジョルジュ・カステックス、カイヨワ、シュネデール、トドロフ、スタインメッツなどの著作を参照していただくとして、ここでは、我が国のこの方面の専門家と目される篠田知和基氏の一文を引用しておこう。篠田氏は『フランス幻想文学の綜合研究』（国書刊行会）の「第一部　理論と構造」の〔Ⅰ　規定と認識〕の章において「こんにちではフランスは世界の幻想文学研究の指導的立場にある」とした上で、次のように述べている。

……トドロフの理論が翻訳、紹介され、導入されていった文化圏ではそのころ（一九七〇年代）から世界共通の文芸用語として『幻想（ファンタスティック）』の語がとくに名詞として用いられ、こんにちでは大体、共通の理解が基本的には出来ている。すなわち「幻想」とは広い概念では現実を越える想像力の文学を指し、「驚異（メルヴェイユー）」と「怪異（エトランジュ）」を含むが、厳密な概念では、それは「驚異」と「怪異」の接する境にあるとされる。「驚異」はファンテジーであり、『アリス』の世界であり、「怪異」はゴシックであり、ホラー（恐怖）の世界である。

続いて篠田氏は、我が国の現状に触れて、トドロフの理論に代表される「共通の理解」とは聊か異なる高橋英夫氏の規定（エピファニーの文学）や高山宏氏の規定（異界の文学、閾を越える文学）を例に挙げ、一応の評価を下しながらも、「ヴァックスからトドロフに至る理論家が打ちたてようとしたジャンル区分における『驚異』と『怪異』の『幻想』からの峻別はやはり継承し利用したほうが混乱を

避けるのに有効であろうと思われる」と氏自身の立場を鮮明にしている。

翻って、私をも含めた現在唯今の我が国の読者一般の〈幻想文学〉に対する理解はいかなるものかと申せば、相変わらず〈怪奇と幻想〉であり、篠田氏の要約に言う「驚異」と「怪異」を含む「現実を越える想像力の文学」すなわち「広い概念」の域に在るのではなかろうか。尤も、作家は理論に則って作品を書きはしないし、読者もまた理論を踏まえて作品を読むわけではないから、必ずしも理論家・研究者間の「共通の理解」が至上のものだとは言えないかも知れない。私などは、従来のイギリス流の呼称（フェアリーテール、ファンタジー、ゴシック・ロマンス、スーパーナチュラル、ホラー……）の集合が〈幻想文学〉であっても一向に差閊えないと考えている退嬰的な人種だが、日本語としての〈幻想〉が未だ揺れ動き曖昧さを引き摺っている現状を考え合わせると、当面は「広い概念」に拠るのがよろしかろうと愚考する。

フランスの理論家達が規定するような〈幻想文学〉が日本に存在するのか否か。カイヨワとスタインメッツは口を揃えるように「中国と日本は例外だ」という意味のことを言っている。つまり、彼らの規定しようとする〈幻想文学〉と殆ど類似のものは存在する（それも西洋よりも杳かに古い時代から）が、在り方が異なると言っているようである。あるいは〈幻想文学前駆〉とも申すべきものが過半を占めるのかも知れない。

私はここに、身のほども顧みず、大それた通史のごときを試みる訣であるが、フランスの理論家達が熱心に並べ立てている〈幻想文学〉のテーマ（曰く、幽霊・分身・怪物・悪夢・妄想・憑依……等々）をも借りて物差となしつつ、日本の〈幻想文学〉について、その原型のごときものから始めて一通り

触れてみたいと思う。〈文学〉というからには詩歌・戯曲の類をも視界に入れるべきであろうが、この分野に限っては読者の興味は散文とくに小説に向けられているに違いないから、自ずと小説中心の叙述となるだろう。ただ、我が国では芸能が文学の上に立って影響を揮ったこともあるので、左様な時代――具体的には能や歌舞伎の隆盛期に差しかかった際には、よくこれを吟味したい。古典時代に関しては簡略ながらも通史の体を心がける所存ながら、近代現代に至っては急所重視に変ずるかと思う。おそらく自分の嗜好が相応に反映されるだろう。重要なことは〈純と通俗の別〉などではなく〈技術的達成と感銘の存否〉であり、すなわち〈美的至福の有無〉と申すに尽きる。以前、戯れに「一概に怪奇小説・幻想小説と括られるものの玉石渾淆の観があるから鰻や寿司のように松・竹・梅とランクを付けた方がよい」という意味のことを記したが、その気持は今も変わっていない。

吸血鬼の本や歌舞伎の本を書いた時にも感じたことなのだが、真当な研究や批評は私のよく成しうるところではなく、可能だと思うのは一種のアンソロジー目録の編纂にすぎない。本書もまた通史仕立のカタログの観を呈するだろう。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook